外国語（英語）の発話教育を音楽言語の観点から捉える試み

An Attempt to Study Foreign Language (English) Speech Education from the Perspective of Musical Language

西尾　洋

NISHIO Yo

本稿は外国語（英語）で書かれた詞と曲の合一である音楽の構造を利用して，詞である外国語の自然な発話指導法の開発を報告するものである。西洋音楽を構成する諸要素のうち，フレーズ構造や韻律は，たんにその用語のみならず，内容面でも言語との関連が密接な場合が多い。そのため，詞に曲がつけられたときに，言語で記号化されない音声的な抑揚や強勢などが強調されて現れることがある。この関係を利用し，執筆者は言語を「音楽的に」話す訓練をすることによって，文意に自然に従った発話が学習されうるのではないかとの仮説を立て，その指導法を開発し，大学の講義で実践した。

This paper reports on the development of a method for teaching natural speech of foreign lyrics by using the structure of music. A song is the union of music and lyric. Of the various elements that make up Western music, phrase structure and prosody are often closely related to language not only in terms of their terminology but also in terms of their content. Therefore, when lyrics are set to music, phonetic intonations and stresses that are not encoded in language can be occasionally emphasized. Taking advantage of this relationship, the author hypothesized that by training students to speak a language "musically," they could learn to speak in a way that naturally follows the meaning of the sentence.

キーワード：英語学習，音楽，抑揚，韻律，フレーズ
Key words: learning English, music, intonation, prosody, phrase

１．問題の所在と研究の方法

外国語学習の諸領域のうち，流暢で，かつ自然に文意が伝わる発話の方法は，文字情報から学べないことの一つである。本稿は言語に深い関係を持ち，音声情報である音楽の観点から切り込んでその解決を図る指導法を開発するものである。

執筆者は音楽教育に携わるなかで，音楽の演奏において同じ問題にしばしば直面する。すなわち，そこでは楽譜に書かれたとおりの音が書かれたとおりのタイミングで演奏されているにも拘わらず，それが音楽の構造や意味を動的に表出していない。なぜなら音楽の構造や意味は記号の組み合わせから演奏者が読み解くものであり，それ自体は記述されていないからである。これら

の記述されない「構造」については音楽理論（楽典，和声法，対位法など）で説明され訓練もなされるが，それが演奏法へ翻案される部分は対象外のため，必ずしも懸案が解決するとは限らない。

執筆者は歌詞と音楽の不可分な関わりの一例について明らかにした（西尾 2020）。ここでは詞の構造が音楽表現にほとんど対等に直結していることを，音楽学習側の観点から詞（言語）を参照しながら証明した。楽譜から読み取り切れない構造や，表現時の適切な抑揚等が，詞の文法的な成分や構造から理解されうる。もしこのように言語と音楽の関係が密接かつほぼ対等であるなら，逆方向の考え方，つまり言語学習において音楽を参照する方法も成立するはずである。ただしこのとき，詞と音楽が密接に関係するように作曲（作詞）された作品のみが考察の対象となる。

本稿ではフレーズ構造と韻律についての分析を研究の基本としている。フレーズ構造と韻律は，音楽と言語に共通する要素であり，分析が容易なうえ，その正しい理解は演奏や発話に有効に作用する。共通する要素でも，たとえば言語の発音や音楽の音程は，母語話者か否かや演奏経験の多寡の違いなどによっており，簡単に克服できないため，除外する。

本稿は上記の仮説に基づき，フレーズ構造と韻律の理解に焦点を絞った外国語の発話指導法を開発するものである。今回は最も学習優先度の高い英語を対象とし，以下の方法で授業を実践した。

- 小学校における英語教育に相当する水準の簡易な歌詞と，同じくきわめて簡素で単純な構造の曲が用いられている歌を題材とする。
- 曲の構造と詞の文法構造の共通点を分析する。
- 曲の演奏法と詞の発話法が共通するか検証する。
- 曲の演奏法に基づきながら，詞を曲から独立した言語（詩）として発話する訓練をする。

なお，本研究は学習効果の検証までは行っておらず，実践の報告に留まる。

２．授業実践

詞，曲ともにヘンリー・クレイ・ワーク（Henry Clay Work 1832-84）による《大きな古時計 My Grandfather’s Clock》を題材とした。選定の理由は，詞の文法や語彙が平易であること，誰もが暗譜で歌える曲であること，訳詞によって詞の大意が知られていること，詞と曲に一定の関連が見られること，音源がインターネットで誰でも容易に入手できることによる。

対象は岐阜大学教育学部音楽教育講座の学生である。学生らは音楽を専門に学んでいるため，音楽の用語や概念の基本的な理解は共有しており，楽譜の読解や歌唱に特段の問題はない。

この題材による授業は 5 回実施した。各回ともに，授業内の 30〜40 分程度をこれに充てた。授業では詞の全体を取り扱ったが，本稿では原理を説明するに留めるため，以下に《大きな古時計》の詞から第 1 節のみを抜粋して掲載する。各行の頭に行番号を付した。

1 My grandfather's clock was too large for the shelf,
2 So it stood ninety years on the floor.
3 It was taller by half than the old man himself,
4 Though it weighed not a penny weight more.
5 It was bought on the morn of the day that he was born,
6 And was always his treasure and pride.
7 But it stopped short, never to go again
8 When the old man died.
9 Ninety years without slumbering, tick, tock, tick, tock
10 His life seconds numbering, tick, tock, tick, tock
11 It stopped short, never to go again
12 When the old man died.

（1）曲の形式を分析する

本稿では楽譜の代わりに上掲の詞を用いて解説する。1-2 と 3-4 行目はそれぞれ同じ旋律であり，ともに末尾が全終止で区切れる。いわゆる A メロである。5-6 行目は音域が上がり，半終止で終わる。B メロである。7-8 行目はそれまでの部分を閉じる性格であり，全終止で終わる。C メロである。ここまでで内容的に三部形式を形成していると見ることもできる。続く 9-12 行目はコーラスまたはリフレインである。

（2）詞の形式を分析する

脚韻が 1 と 3 行目（-elf），2 と 4 行目（-or），5 行目内に 2 箇所（-orn），6 と 8 行目（-i[e]d），9 と 10 行目（-umbering）に見られる。これらから，1-4 行目，5-8 行目，9-12 行目の 3 つに区分することができる。（1）と（2）から，曲と詞の構造には一定の関連が見られることがわかる。

練習：脚韻に注目して演奏を聴く。また自分で詞を朗読する。

（3）詞に小節線を書き入れる

楽譜上の小節線に対応する詞の語と語の間に縦線を書き入れる。この詞の場合，以下のような間隔で書き入れるのが適当であると考えられるが，授業内ではそれぞれの学生が思ったように書かせた。

次に小節線の直後にやってくる語の母音に印をつける。ここでは，長い，強い，深いなどと思われる母音には太字で下線を付し，そうではないものは太字とした。区分は音楽的な基準としたため英語の通常の長短を反映しない箇所があるが，ここでは何らかの印が付されることが重要である。

1 My | gr**a**ndfather's | cl**o**ck was too | l**a**rge for the | sh**e**lf,
2 So it | st**oo**d ninety | y**ea**rs on the | fl**oo**r.
3 It was | t**a**ller by | h**a**lf than the | **o**ld man him | -s**e**lf,

4　Though it | w**ei**ghed not a | p**e**nny weight | m**o**re.
5　It was | b**ou**ght on the | m**o**rn of the | d**a**y that he was | b**o**rn,
6　And was | **a**lways his | tr**ea**sure and | pr**i**de.
7　But it | st**o**pped | sh**o**rt, | n**e**ver to go a | -g**ai**n
8　When the | **o**ld | m**a**n | d**ie**d.
9　Ninety | y**ea**rs without | sl**u**mbering, | t**i**ck, tock, | t**i**ck, tock
10　His | l**i**fe seconds | n**u**mbering, | t**i**ck, tock, | t**i**ck, tock
11　It | st**o**pped | sh**o**rt, | n**e**ver to go a | -g**ai**n
12　When the | **o**ld | m**a**n | d**ie**d.

ここで，以上の書き込みを見ながら実際の演奏を聴いてみると，これらの太字を含む単語は多少なりとも強調されて歌われていることがわかる。強調の方法は，母音を長めに歌ったり，他の単語よりはっきりと発音したりとさまざまである。このことから，詞の韻律と音楽の韻律（拍節）には強い相関が見られることが理解される。これは詞において本来設計されている韻律に従って作曲されるのが通常であるため，当然である。つまり，楽譜にしたときに小節線の次に書かれている単語は，程度の差はあるものの，比較的強調される傾向にあると考えてよいし，音楽においては，そこに充てられている音は同様に強調して響かせられることになる。小節線に相当するものは詞の文面には現れないため，韻律（拍節）の理解という点では音楽で用いる楽譜は非常に有用である。

これらの単語は文の中で重要な意味をもつものであることに注目する。つまり，これらの単語には相手に伝えたい内容がより多く含まれていることになる。

なお，強調される単語同士の関係に着目すると，長母音と短母音の組み合わせに一定の規則性が見られる箇所がある（例：1-2 行目と 3-4 行目）。詞だけの段階ですでに韻律的，音楽的に作られている。

練習：以上の考察を踏まえ，各項目が明瞭に発現するように発話をする。

（４）強調される単語とそれ以外の単語の間に見られる流れを見出す

上記（３）において太字で示した単語は，もぐらたたきで突然出てきたかのように強調され，そして消えていくのではなく，そこにいたる自然な流れによって準備され，そして同様に自然に収束していく，一定の間隔に近い起伏を伴っている。とりわけ太字の単語の前にある流れは重要であり，音楽ではアウフタクト（Auftakt）もしくはアナクルーシス（anacrusis）という。

この，強調される単語を中心とした前後数単語のまとまりを，楽譜におけるフレージング・スラーのような記号で示す。開始点と終了点は詞の意味や構造を基準に考える。一意に決めかねる箇所が出てきたり，開始点や終了点が明瞭ではない場合があったりしても，特に気にしなくてよい。

このとき，強調される単語が文中に複数現れることが多い。そのいずれかがもっとも強い意味内容を帯びていると考えられる場合，これを重心と捉える。この重心にいたる「まとまり」の数々は，より大きな意味でのアウフタクトとなる。たとえば上掲の詞の 1 行目における重心は，

単語の意味内容からも，また音楽面からも”large”と考えられる。そのため，そこまでの流れは軒並み”large”へ集結していくことになる。

練習：自分で記したフレージング・スラーを一つのまとまりとして捉えて発話する。またフレーズの重心がある場合，そこにいたる流れを構築して発話する。訓練のため，表現は多少大袈裟と思われる程度がよい。

（５）行同士の関係を考えて詞を朗読する

これまでの検証では，次のような水準で詞の内部の力関係を明らかにしてきた。

①強調される単語（３）

②強調される単語とその前後のまとまり（４）

③脚韻（２）や終止（１）による形式的なまとまり

このうち，①と②については朗読練習が終わっている。ここでは③に従った朗読法を考察する。詞を見ると，原則として奇数行はコンマ（, ）で，偶数行はピリオド（. ）で終わっている。7-8 行目ではコンマはないが，8 行目が従属節であることから同様に扱う。9-10 行目は同格の繰り返しであり，また 11-12 行目は 7-8 行目と同じく従属節を伴っている。つまり 2 行で一つのまとまりと考えることができる。奇数行を読んでいるとき，話し手の気持ちがまだ終止せず，それは偶数行の終わりまで持続する。こうしてみると，脚韻は不規則に並んでいるのではなく，文の意味を構造的にわかりやすく示す役割も負っている。以上の点に留意した朗読を行う。

３．検討事項

本研究で開発した指導法では，自然な抑揚と淀みのない流れを伴う英語の発話が学習できる。抑揚も流れも文字情報としては記述されていないので，それが小節線，音高，リズム，拍節（韻律）等を伴って記述される音楽の観点から学習されたとき，一定の程度で言語学習の不足を補うことが原理的には可能となる。

歌を使った指導法の課題としては有節歌曲の問題がある。有節歌曲の場合，複数の節でまったく同じ韻律や脚韻が用いられているわけでは必ずしもなく，また単語の意味も節ごとに当然異なってくるため，それらが基本的に同じ旋律に充てられていることの是非は考慮する必要がある。有節歌曲は最終的に音楽が詞に優先せざるをえないため，指導の際には教師が適切な補足をすることが求められる。

小張（2003）によれば，日本人の英語は，英語母語話者と比較したとき平均的に抑揚の上下幅が狭く，とりわけ内容語と機能語の発音にあまり差がみられないという。その問題点は本稿の手法である程度改善されることになる。

外国語の構造を既知のものからの類推で理解させるということでいえば，限界があることを承知しているという条件のもと，詞（詩）を日本語に置き換えても一定の成果が得られる可能性はある。軽尾（2017）は日本語を活用した韻律指導法を考案している。これは学習者がすでに持っている有効な感覚を英語学習に結びつけようとするものである。この中で日本語を英語風に発音してみる試みが紹介されている。外国語話者が日本語を習得するうえでどのような発音上の困難

を抱えているか（中川 1996）を考察することは，日本人が外国語（英語）を学ぶうえで何らかの示唆になる可能性がある。

音楽を用いた英語学習法の多くは，角山（2001）が指摘するように，学習者の心理的側面を和らげたり，授業を楽しい雰囲気にしたりするといったような観点で考案されている。そこで角山の提案した英語教育における音楽の利用法は，「音の弱化，同化，脱落，連結などといった自然な発話で生じる様々な音声変化や英語のリズムを習得するための題材として歌を活用する」ものである。歌や音楽が学習を総合的に効果的なものにすることは多くの場合そうかもしれないが，もし文脈から切り離された発音上の問題を学ぶのみであれば，厳密にいえばそれが歌である必要はなく，弱化や同化等を適切に表現した音声の録音で足りるといえなくもない。もちろんこれは取られた手法への批判ではまったくなく，むしろ外国語学習の重要な点を音声情報である音楽の利用によって克服している点が長所だといえる。本稿の視点から付言するなら，音楽を利用しているのであれば，そこに音楽上の観点が加わるとより効果的だということである。

本稿で開発した指導法は，音楽に見られる構造が音楽表現にも言語表現にも共通して出現するため，相互補完をしながら相互を学習しうるという土台のもと，音楽から言語（英語）へ，という方向性を意識したものであり，音楽も言語もともに統語論的に理解し，構造に従った自然な表現（発話，演奏）に結びつけることができる指導法である。主眼は文意に逆らわない自然な流れによる発話の会得であり，文脈から独立した単語ごとの発音法などの音声的な側面は本稿では特段取り扱っていない。

今後の課題としては，まずこの指導法の評価方法の策定が挙げられる。学習者へのアンケートは教育系の研究ではしばしば実施されるが，指導法の学術的な正当性を担保するものかどうか検討の余地があり，今回はアンケートを実施していない。また，本稿では外国語のうち英語を取り扱ったが，西洋音楽と深い関連のある言語であれば英語以外の学習にも応用が可能であり，今後の研究が期待される。

参考文献

小張敬之　篠永将和　板橋秀一　2003　「Fo 分析による日本人話者の英語発音と英語母語話者の音声の特徴」『第 65 回全国大会講演論文集』2　35-36

角山照彦　2001　「英語教育における音楽教材の活用―音楽と異文化トピックを組み合わせた総合教材『ポップスで学ぶ総合英語』の開発―」『広島文教女子大学紀要』36　9-20

軽尾弥々　磯田貴道　大和知史　2017　「日本語を活用した英語プロソディ指導」『神戸大学国際コミュニケーションセンター論集』14　14-23

中川かず子　1996　「英語母語話者による日本語の音声（韻律）の習得に向けて」『北海学園大学人文論集』7　95-118

西尾洋　2020　「シューマン《詩人の恋》にみるドイツ語の構文，韻律と音楽理論の相関」『岐阜大学教育学部研究報告（人文科学）』68-2　69-76

（令和 3 年 1 月 4 日受理）